【小林明子先生】

「これから補綴治療・再治療のBig waveが来る！」

～口腔の健康改善・長期維持安定のための本物のチーム医療を求めて～

今私たちは新型コロナ感染症のパンデミックにより世界中で環境や行動が一瞬のうちに変わってきたことを経験しました。そして国民の健康への意識や関心はかつてないほどの高まりを見せています。特に2026年には高齢者率は３８％予想の前で、健康で楽しい食事を望む人びとが予防やメインテナンスに関心を寄せていますが、実は高齢者の多くが補綴の洪水と言われた1970年代に治療を受け、50年後の今日、全員が再治療を余儀なくされ大量の補綴再治療のBig waveに突入する可能性はたかいだろう。

“これから仕事がなくなるのでは”と心配の声を聞きますが、歯科技工士減少の現実の中むしろこの現状に懸念せざるを得ません。

しかしながら、人生100年時代を見据えたこれからの歯科医療は、これまでの完結型主導の治療から、健康増進の医療へと確実にシフトして、自分の生涯の健康を支える重要な補綴装置として、自分のための健康をサポートしてくれる丁寧な医療を求めてきます。歯科衛生士には口腔の健康改善から長期維持安定を管理していくことが使命になり、そして本物のチーム力が試されてくるわけです。私は日々、歯科技工士の目と歯科衛生士の目で臨床の現場にいますが、それぞれ見る観点が違うため私自身の中でもこのバランスを取ることに苦労します。しかし互いの違いや交わるところを理解し、また歯科技工士がなかなか知ることのできない予後の状況、ダイナミックに変化する口腔内の変化や患者の思いを共有することでこそ、医療貢献を実感することができ歯科医療の専門職として今以上にやりがいや誇りを持つことができるのだと信じています。今後CAD/CAMやIOSなどデジタルテクノロジーは急加速していますが、現場はやはり患者中心に応えられる能力と技量が求められています。新時代に向けて本物のチーム医療を目指すために　これからの課題もお話しできたら幸いです

【西村好美先生】

「デジタル時代だからこそ、歯周組織と咬合に考慮した補綴装置の形態を考える」
～　患者を知る！長期予後も考慮した視点と知識でデジタル時代に対応する　～

超高齢社会の日本において全身の健康と口腔の健康の関連性が注目されるなか、2009 年に歯科衛生士資格を取得後に歯科技工士と歯科衛生士の両方の視点から予防やメインテナンスに対する意識が変わったことはまぎれもない事実です。

現在では、私が担当した約 30 年の症例経過やさまざまな経験から、補綴装置セット後に長期的な良好な予後を保つという意味において、メインテナンスによる予防の重要性を感じています。 より良い補綴治療を行い、長期的な予後を保つためには、やはり歯科医師・歯科技工士・歯科衛生士がチームとして連携することが不可欠です。補綴装置を装着した後の 10 年、20 年と患者さんの日々の生活で審美性だけではなく、適切に機能する補綴装置を製作するためには、予防の視点は欠かすことはできません。 補綴装置の装着後の永続性を考えた場合、加齢にともなう咬合の変化を見ていくことも大切です。近年のデジタル化の進展によって、上下顎での咬合力の変化や各部分における咬合状態の変化など、数値や映像で見ることができるようになる（可視化）ことで、補綴治療はさらに進化していくでしょう。その時、歯科技工士としてどのような役割を果たすことができるでしょうか。

患者の笑顔と口腔内の健康を考えた時、それぞれの症例に対応するためには、経験から得た知識や技術を活かし、補綴装置の歯周組織との調和、機能性と咬合の安定、構造力学など、補綴装置にまつわるさまざまなテーマの追求と向上心をもって知恵を備えていくことが重要です。たとえ、デジタル化がどんなに進もうとも補綴装置のデザインや最終的なチェックは、歯科技工士が行います。デジタル時代だからこそ歯科技工士としてのアナログの価値が再評価されるはずです。

そこで今回の講演では、デジタル時代だからこそ歯周組織と咬合を考慮した補綴装置形態について、私なりの考えを述べたいと思います。